

Title	ヨナ斯的神話をめぐるヨナスとブルトマンの論争
Author(s)	兼松, 誠
Citation	西日本哲学年報, 第 19 号, 2011.10 : 55-71
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3555
Rights	西日本哲学会



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ヨナスの神話をめぐるヨナスとブルトマンの論争

兼松 誠

一、導入

一九七九年の『責任という原理——科学技術文明のために』^①がハンス・ヨナスの思想の到達点であることに誰も異論はないであろう。とは言え、ハイデガーとブルトマンを師とするヨナスはグノーシス研究から出発したのであり、当初から倫理學に関わっていたわけではなかった。その彼が、何故最後は倫理學研究へと向かったのか？彼のよく知られた論文のひとつ「グノーシス主義、実存主義、ニヒリズム」^②はそのことを明らかにしている。それによると、世界の中に人間が孤独に投げ出されているという精神状況を共有している後期古代のグノーシス主義と現代の実存主義の間には類似性が存在している。グノーシス主義によれば、世界とは神の創造の失敗作であり、人間はその世界に投げ込まれている存在である。つまり、グノーシス主義とは神と世界、世界と人間の間に徹底的な断絶を認める反宇宙論的三元論であるわけだが、自分が意味のある世界に属するという感覚の欠如は、現世での生には意味がないというニヒリズムを帰結させた。これは、倫理學がその存在

論的基盤を喪失しているという事態である。グノーシス主義からも、そしてヨナスによってその類似性を指摘された実存主義からも積極的な仕方では倫理学は出てこない。師のハイデガーの親ナチ的な発言はヨナスに衝撃を与えたが、それもこの種の倫理学の不在によるものと彼は考えた。こうして彼は、グノーシス主義が——そして現代の実存主義もが——依拠していた反宇宙論的・二元論的世界観を克服するかたちでの倫理学を目指すことになったのである。

ところでヨナスは一九八四年、チュービンゲン大学からレオポルド・ルーカス博士賞を授けられる。その受賞講演が「アウシュヴィッツ以後の神の概念」である。ヨナスはそこで、アウシュヴィッツという惨劇を許したのはどのような神かを問うた。ヨナスは、この講演の中で自作の神話を開陳している。

ヨナスのこの自作の神話も、倫理学研究へ向かったヨナスの思想的格闘の産物である。この神話をめぐって、ヨナスとブルトマンは議論をやりとりしている。ヨナスは、ナチスに加担したハイデガーを随所であからさまに批判した一方で、ブルトマン個人に対しては常に尊敬の念を抱いており、表立った反ブルトマン論を展開しなかった。そのためか、これまでのヨナス研究においてブルトマンが注目されてこなかった嫌いがある。しかし、倫理学の存在論的基礎付けを目指す途上で、ヨナスはブルトマンとの対決を避けることができなかったようである。次のヨナスの言葉は、そのことをはっきりと示唆している——「明らかに：私がこの象徴的神話に訴えていること：は、それ自体で既に、ブルトマンの厳格な非神話化論とは異質なものであった。そしてその不一致は、「ハイデガーと神学」の終わりの部分において、私によってはっきりとしたものとなった。さらにその後、私は合理的「神学」の観点においてこの仮説的「神話」からいくつかの結論を引き出すことを企てた。かくしてブルトマンが大変鋭い天性によって退けた「対象的な」学説の道を、私はさらにもう一步踏み出したのである。これについては「アウシュヴィッツ以後の神の概念」を参照せよ。⁽⁴⁾」

この小論では、後で生じた二人の思想的軋轢の内実を明らかにしたい。まず、二人の議論はヨナスの神話をめぐってのもので、まずヨナスの神話の内容を確認する。次に、ヨナスの神話に対するブルトマンの批判は、ブルトマン神学の代名

詞とも言うべき非神話化の議論が前提になっているので、非神話化の内容を確認する。そして、そのあとで、ヨナスの弁明の内容を確認する。

二、ヨナスの神話

二・一、ヨナスの神話の概要——神の世界冒険

ヨナスの自作の神話は、神の世界冒険とも言うべきものである。「アウシュヴィッツ以後の神の概念」および周辺の文献をもつてまとめると神話の概要は以下になる。

神はある時、世界を創造することを決断して、自らを全て生成における偶然性と多様性にゆだねた。これは空間と時間のうちでの冒険である。しかし、その際、自分の力の全てを世界の創造へとそっくりそのまま明け渡してしまったので神にはもはや何も残されておらず、その生成の過程に介入することすらできない有り様となった。神は世界の存在のために、それ自身の存在を断念したのである。そういうわけでヨナスの言う神は、全面的に無力な神で、そのためアウシュヴィッツの惨劇にも介入できなかったのである。介入できるにも関わらず介入しなかったのではなく、そもそも神ははじめからそのような力をもっていなかったたのである。そういうわけで、神を責めることはできないのである。

さて、神は全面的に無力なので、予見する能力も失ってしまった。神は世界の生成過程を漂っている。悠久の時間をへて、やがて世界に生命が誕生し、そして長い紆余曲折を経て人間が登場することになる。しかし同時に、罪を犯しうるものとしての人間の出現によって世界は純真無垢の在り方を終えることになる。人間は神の創造の試みを肯定し、引き継いでいる一方で、創造を台無しにし、神を失望させることもできる存在だからである。神の像は今や危機に瀕している。神を失望させることがあってはならないとヨナスは言う。人間の出現によって、倫理的な善悪の問題が出現したのである。人間は、この

全面的に無力な神に対する責任を負っている…。

ヨナスは『責任という原理』において倫理学的存在論的基礎付けを目指したが、ここでは人間の責任は世界の創造に対する、そして神に対する責任として表現されている。しかし、何故このような神話論をヨナスは必要としたのか？ 思想的コンテクストがわからないとこの神話の意義をつかむことは容易ではない。しかし、第一級の新約学者であり、ヨナスの師であったブルトマンは、さすがにこの神話の議論の奥行きを見抜いた。ブルトマンは一九七六年に九一歳で亡くなっているので、一九八四年におけるヨナスの受賞講演を聞いたわけではない。ブルトマンは一九六二年の時点でヨナスの神話を既に知っていたのである。

二・二、ヨナスの神話に対するブルトマンのコメント

ヨナスが一九八四年の受賞講演において提示した神話は、既に一九六六年の『生命という現象』の第一論文「不死性と現代的気分」⁽⁵⁾においてすでに提示されていたものである。この論文は、一九六一年のハーヴァード大学のインガソル・レクチャーで発表され、それが一九六二年の〈Harvard Theological Reviews〉誌五五号に掲載されたものである。ブルトマンが読んだのはこれであり、すぐさまヨナスにコメントを寄せている。これは、その後、ヨナスとの往復書簡という形で一九六三年の『無と永遠性の間で』⁽⁶⁾に収録されているが、そこでブルトマンは、ヨナスの自作の神話に最初に言及する際に引用符を付しており(SZES)、それが彼の注意を喚起した経緯を伺わせている。

ブルトマンのコメントは批判的なものであった。⁽⁷⁾それはまさにヨナスが神話論的であるからである。ブルトマンはその書簡の中でヨナスの論文を要約しているが、ヨナスの神話の特徴を次のように指摘している——「さて、『神話』の意味は本来は何なのでしょうか？ 我々の行為が冒険における歩み(stades)⁽⁸⁾を意味している限りで、そして我々自身が永遠性の大胆な試みと見なされる限りで、『不死性と現代的気分』の」第V章のもとで語られていることはすでにして神話論的です。

そして、グノーシスとのつながりにおいては、宇宙において神自身の運命が危機に瀕していること、神の運命が人間に委ねられていることが意味されているとしたら、同様にして、そしてなおさらのこと、それはすでにして神話論的です。」(ZNE 65)

ブルトマンはゲーテの詩を引用し、ヨナスとゲーテの間にはアナロジーが存在しているという——「あなたが、超越的なものの、世界生起において増大しつつある貴重財について語るとき、神性があらゆる対立の和解的な統一として考えられている限りで、神の言葉に關して「ヨナスとゲーテの間には」アナロジーが横たわっているように、つまり神の概念が結局のところ美学的な概念であるように私には思われます」(ZNE 66、傍点引用者)。さらに、神およびその働きをヨナスのように考えることは、それらを「外側からみる von außen betrachten」(ZNE 67) ことであり、「その都度固有の実存からではなく、内世界的な現存在から描く」(ZNE 67) ことであり、結局のところ、ヨナスの神話は固有の実存理解の表現ではない、とブルトマンは考える。

上述のブルトマンの批判的コメントは、次章で確認するように、ブルトマンが新約聖書の非神話化の提唱者であったことを想起すれば容易に理解しうるものである。つまり、ブルトマンは、非神話化とは逆の作業つまり「対象化」を行っていることでヨナスを非難しているのである。

三、非神話化

三・一、ブルトマンの非神話化

ブルトマンは、ヨナス的神話を「美学的」である、「外側からみている」、つまり「対象化」的であると批判しているのがあるが、このような批判をヨナスが予想していないわけがなかった。何故なら、ヨナスはブルトマン神学の代名詞とも言う

べき非神話化のことをよく知っていたからである。と言うよりも、「非神話化」の言葉を用いたのがほかならぬヨナスであった。一般にこの言葉のブルトマンにおける初めての登場は一九四一年のアルビルスバツハ講演であるとされている。⁹⁾ヨナスはそれよりも一年前の著作の付論の中ですでにこの言葉を用いていたのであった。¹⁰⁾青年ヨナスは、一九三〇年に『アウグステイヌスとパウロ的自由の問題』を、一九三四年に『グノーシスと後期古代の精神』を書いているが、いずれもブルトマンによって、実存論的解釈のすぐれた研究として高く評価されている。

ブルトマンの非神話化は聖書テクストを不必要な、そしてその理解を妨げる障碍から、つまり時代遅れの——近代的世界像とは相容れない——神話論的世界像の遺物から解放する作業である。これは同時に、信仰にとつての障碍を取り除くことでもある。したがって、ブルトマンの非神話化は、信仰の可能性を救うという守りの側面と、真の信仰の内容を掘り起こそうとする攻めの側面とを持っている。

ブルトマンによると、新約聖書は、ユダヤ的黙示文学とグノーシスの救済神話という二つの神話論によって語られているが、神話の本来の意義は、対象的な世界像を与えることにあるのではない。神話は、人間自身が自己の世界において、自己をどのように理解しているかということと表現しているのである。神話は、宇宙論的ではなく、人間学的に、むしろ「実存論的に」解釈されることを求めている。神話は、人間の世界における自己と経験の根底にあり限界としてあるものについて、あるいは諸々の力について語っている。

神話は、「この諸力を象徴的に、既知の世界、その世界の事物および諸力の枠内へ、そして人間生活、その情動、動機、可能性の枠内へと取り入れるようにして、この諸力について語る」(NTM 23)。つまり神話は、未知の力を我々に身近かな経験の領域に置き換えて語っているのである。起源神話における「世界卵」や「世界樹」は世界の起源を語るが、その際も、「卵」や「木」という身近なもので語られている。また、世界の状態や秩序は、闘争という人間的経験に基づいて、神々の闘争によって引き起こされたものとして説明されたりもする。

神話が表明しているのは、人間の世界がそれ自体で根拠と目的とを有せず、むしろそれらは世界の外部にあり、世界は外的な不気味な力によって支配されており、脅かされているという信仰である。人間はサタンやその配下の悪鬼たちが人間に対して超自然的に行使する力に翻弄され支配されるが、彼岸的な力に依存することによってこうした力から解放されるという信仰をも表現している。したがって神話本来の意義とは、「世界と人間を服従させている彼岸的な力について語る」(NTM 23) ことであるわけだが、その発言の「対象化する性格」(NTM 23) がそれを阻み、覆ってしまうのである。神話におけるこの対象化される以前の、あるいは対象化されることができない人間の自己理解を明らかにする解釈学的作業がブルトマンの非神話化なのであった。

ブルトマンにおいては、神話における象徴的言語や図像による対象化の根底には人間の自己理解という実存的なるものが横たわっており、この人間理解なくして神理解もない。そうであるが故に、対象化的な神話論的宇宙論においては神の働きが適切に理解されることもない。ブルトマンによれば、神の働きは対象化以前の領域つまり実存の領域において理解されなければならない。しかし、ヨナスの神話において、神の働きは対象化された世界の内側で語られている。つまり、神の働きを「その都度固有の実存からではなく、内世界的な現存在から描」(SNE 67) いているヨナスの神話は、ブルトマンからすると、神の働きについての適切な語りということはできないのである。

三・二、対象化と宇宙論

ブルトマンは、神話論的なものにおいては、「非世界的なもの、神的なものは世界的なもの、人間的なものとして、彼岸的なものは此岸的なものとして」(NTM 23, Anm.2) 表象されると述べる。つまり、神話とは彼岸的なものの此岸化である。そして、この彼岸的なものの此岸化とは、対象化の一般的効果である。

神話は本来、世界における人間の实存理解を表現しているはずのものであるが、対象化の働きによって、対象的な〔客観

的な」世界像を与えるものとなっている。ブルトマンによると宇宙論とか世界観と呼ばれるものはそういうものである。

ブルトマンの非神話化が、神話における対象化、つまり彼岸的なものの此岸化を克服しようとするものであるかぎり、「宇宙論的」という用語と「実存論的」という用語は、あるいは「終末論的」という用語は対立した関係の下に置かれることになる。当然ブルトマンは（新約聖書における）宇宙論を認めようとしなない。

しかし、非神話化の神学者ブルトマンによってその著書を高く評価されたまさにそのヨナスが追究したもののこそ、これから確認していくように、彼の求める責任の倫理学を可能にする宇宙論なのであった。

四、ヨナスのブルトマン批判

四・一、ヨナス思想全般の問題意識——宇宙論

一般に、ヨナス研究においては、彼の思想的展開を、『グノーシスと後期古代の精神』（一九三四年）に代表されるグノーシス研究の段階、『生命という現象』（一九六六年）に代表される形而上学的生命論の段階、生命倫理学の論客として注目され始め、『責任という原理』（一九八四年）によって一気に有名になった倫理学の段階に分類される。バラバラなテーマ群とといった印象を与えるが、しかし、事情はそうであっても、彼の大まかな問題意識というものは指摘できるように思われる。それは、彼が二元論の克服を意識していたということである。それは、グノーシス論においては、神と世界、世界と人間、霊と肉、彼岸性と此岸性、生命論においては精神的なものと物質的なもの、倫理学においては存在と当為の二元論である。そして、彼の有機体の哲学は、これら二つの領域を統一させようとする試みであつた。そして、ヨナスが随所で口にする宇宙論——正確には宇宙生成論だが——もまたこうした統一的な世界を表現したものであつた。

この宇宙論においては、世界は意味に満ちており、その意味で、あるいはそうであるからこそ、人間が生きているこの世

界はグノーシスの世界像——それによると、世界は創造の失敗作であり、人間は意味もなくそこにただ投げ込まれているだけである——とは対立するものである。しかし、ヨナスのこの宇宙論の追究は、ブルトマンとの間に緊張をもたらさずにはいなかったはずである。何故なら、この宇宙論の克服、厳密には「批判 *Kritik*」こそ、ブルトマンの非神話化が目指したものであったからである。しかし、ヨナスは二元論の克服の可能性を宇宙論の再構築に求め、さらに倫理学への足がかりをえようとした。ヨナスの構想においては、倫理学のためには宇宙論が必要不可欠なのであるが、その宇宙論の問題でヨナスはブルトマンという巨大な壁におつかった。この思想的対決において、ヨナスがブルトマンに見たものは、まさに自分が克服しようとしている二元論の問題であつた。

四・二、ブルトマン批判——彼の二元論に関して

一九七六年、ブルトマンが他界すると、この偉大な神学者のためにマールブルク大学神学部は式典を行った。その際、追悼講演を行ったのはハイデルベルク大学のエーリッヒ・ディンクラーであり、もう一人がヨナスであつた。この時のヨナスの講演は、その後書き足されて『ルドルフ・ブルトマンの思い出』⁽¹²⁾に収録されて公刊されている。

この論文の中でヨナスはブルトマンの思い出を語るとともに、ブルトマン批判を展開している。それに対して、もしブルトマンが生きていたら、眉をひそめ、疑わしげに首を振って、次のようにヨナスに批判し返してくるのではないかと述べている——「しかし、親愛なる友よ、君はそこで思弁していいのだろうか？ 人間を通じて——少なくとも人間を通じて——神が…創造に介入することによって、はつきりとした名指すことのできる行為において世界を動かすのだと、もし君が考えるのだとしたら、君は対象的に *objektivierend*、いわば外側から *von außen* 神について語ってはいないだろうか？」(KMG 70、傍点引用者)と。ヨナスはこの批判に対して、その通りだと答え、「思想のためにも信仰のためにも対象的にならなくてはならない」(KMG 70、傍点引用者)と主張する。こうしたブルトマンとの「対話は全くの想像の産物」⁽¹³⁾というわけで

はなかった。何故なら、既に確認したように、ブルトマンは一九六二年の時点でこの趣旨の書簡をヨナスに向けて書いていたからである。

ブルトマンの非神話化は、科学全盛の時代において、いかにして聖書の本質的契機を擁護するかという危機意識に貫かれていた。それは、ヨナスが非神話化の守りの defensive 側面と呼んでいるものである (KMG 51)。ブルトマンは「神話論的なものは、この現代思想の生け贄として差し出されなければならない」と言うのも、神話論的なものは、現代思想に受け入れられないものとなっているからである」(KMG 52) と考える。

ブルトマンは、啓蒙の時代以降、宗教が守りの側に立たされていること、そうであるが故に「今日の人間にとって、神話論的世界観、および終焉、救済者、救済の観念は過去のものであり、なくてもよいもの」(GVW 145) となっていること、つまりはブルトマンにとってすら科学の成果がもはや否定できないものであることを謙虚に認める。

しかし一方、基本的にヨナスは科学技術文明の時代にあつてなお科学をそこまで過剰に評価することはなかった。ヨナスは「科学が述べているのは方法論的な規則であつて、形而上学的な主張ではない」(KMG 53) と考えるからである。

そのようなヨナスからすると、ブルトマンは「科学にあまりにも多くのものを認めすぎている」(KMG 53) るように思われるのである。いずれにせよ、ブルトマンは宗教と科学の一種の棲み分けによって「信仰の可能性」を救おうとした。同じ事象を前にして、ある人は科学的説明で満足し、またある人は——決断によって——神の働きを認める。

宗教と科学の棲み分け、つまり両立可能性によって、ブルトマンにおいては、自然の因果性を破るものとしての奇跡という考えが放棄される。ブルトマンによれば、奇跡を自然の因果性を破る現象として捉えることは、神の働きを対象化することに他ならない。そこで、ブルトマンはこのように対象化された「奇跡」を本来の意味での奇跡 Wunder と區別して、「異象 Mirakel」と呼ぶ⁽¹⁴⁾。つまり「誤りは、神の働きを世界的な働きおよび出来事として、神的力量を自然的力として表象することのうちにある」(KMG 57) わけである。これこそが、まさにブルトマンの非神話化論が克服しようとした神話論であり、

対象化であり、世界化 *Verweltlichung* の否定的な働きなのである。

ブルトマンは奇跡を、つまり神の行為を次のように規定する——神の行為は、「世界的な働きや世界的出来事の間で *zwischen* 生じるのではなく、それらのうちで *in* 生起する」(GVN 173)。この解決法によって、同じ出来事を前にして、人はそれを、一方では自然科学的に諸事物の自然過程の連環の一つとしてみることもできるし、他方では信仰において神の贈り物あるいは罰としてみなすことが可能になるのである。ヨナスによれば、これは「外側から」みることを “*von außen*” *sehen* (対象化する)と *objektivieren*)と「内側から」理解する)と “*von innen*” *verstehen* の区別に対応している(KMG 58)。

ブルトマンにおけるこの区別は、カントにおける現象とモノ自体の区別を連想させるとヨナスは言う。現象の領域においては、全ての事物は必然的規則に従っている。モノ自体においては、こうして現象するものは自由の因果性でありうる。現象において決定されている私の活動は、実際のところ、起源および遂行においては私の自由の働きであることを私は信じることができる。同時に現象の背後に、現象へといったものとしての神的な因果性を原理的に認めることができる。現象の背後にあるのは、現象の規則には従属していないモノ自体の超越である。外側からみると、世界的出来事は自然因果性に従っているが、内側からみると、人間の自由、さらには神の主権的な行為を論じることができるようになる。そういうわけで、神の行為を語るブルトマンはカント的である、とヨナスは考える。とは言え、ヨナスは、カントとブルトマンのこうした類似性の有効性についても、ブルトマンがこの類似をそもそも認識していたかどうかについても確信をもっているわけではない。

しかし、もしこの想定が妥当であるとすれば、そのことによって、ブルトマンは大きな負担を背負うことになってしまった、とヨナスは考える。「此岸的因果性の窮屈さと硬直さという誇張された考え方」(KMG 59) がそれである。それによって、ブルトマンの考えに忠実であるならば、超越は隠され、神の自己啓示は排除されてしまう。神の行為は、この世界へと

現象することはなく、我々の内面性へと閉じ込められてしまう。こうなると、ブルトマンにおいては「内面的世界の出来事と、彼岸の神の行為との逆説的な一致」(GVN 136) だけしか残されていない。それを、実存の出会いにおいて、今こゝで体験することができるのは私だけということになる(KMG 66)。

しかし、一方でブルトマンはアモス書の次の一節を引用する——「獅子がほえる、誰が恐れずにいられよう。主なる神が語られる、誰が預言せずにいられようか」(アモス書三・八)。つまり、ブルトマンにおいても、神の呼びかけは、人々に宣べ伝えられなければならないのである。ヨナスは、アモス書のこの一節は、ブルトマンが否定してしまった「内在への超越の侵入」(KMG 66) 以外の何ものでもないと考えている。つまり、神の呼びかけが、モノ自体から現象へと現れ出てきている、というわけである(言うまでもなく、これはブルトマンによれば対象化なのである)。

ヨナスによれば、神は自らを知られたものとし、そして預言者、イエス、使徒といった神に耳を傾けた人たちを通じて、それ自身を世界中に知られたものとなることを望んでいる。したがって、神の呼びかけは「世界へと働きかけるための…力であり…人間の魂を通じてやってくるのである」(KMG 67)。

そういうわけで、「神の働き」というこの概念は、カント的な境界線を横断していることは明白である」(KMG 67)。神の働きはモノ自体とパレレルな超越から、現れそれ自体へと、単に私的な知覚可能性だけでなく、公的な知覚可能性へと侵入してくる。ヨナスによれば、本来、宗教は、個人的実存における「言葉」の内省で満足すること——言うまでもなく、ヨナスはブルトマンがこの段階にとどまっていると考えている——ができないのであり、人間を通じて神の意志の自己啓示として、世界における公的な側面をもたなければならぬのであり、神の働きを此岸の世界の因果性に帰属させなければならぬのである。因果性に帰属させる、とはこの場合、神の呼びかけに呼応するかたちで、つまり神に対して責任的に、人間が、神によって創られたこの世界により好ましいかたちで変化を与える、ということである。この議論の先で、やがてヨナスの責任倫理は展開していくことになるのだが、この奇跡理解の故に、ヨナスはブルトマンによって批判を受けるかたちと

なってしまう。ブルトマンの観点からすれば、神の働きの実存論的理解を目指し、そしてその宇宙論化、世界化、此岸化、要するに対象化の克服が目指されたはずであったのに、再びヨナスは振り出しに戻ってしまったのである。

四・三、ヨナスにおける「対象化」と全体的なるもの

ヨナスにおいては、倫理学の存在論的基礎付けのためには、世界に意味を与え、人間の立ち位置を明らかにしてくれる宇宙論が必要である。しかし、ブルトマンにおいては、宇宙論はすでに対象化である。神が自らの全てを投げ捨てて可能性を世界へと委ねたとするヨナ斯的神話の本質的部分は、ブルトマンによって、神の働きを対象化して理解しているものと見なされる。しかし、こうした対象化との批判をヨナスは単に消極的に受け入れようとしているのではない。すでに引用したように、ヨナスは「思想のためにも信仰のためにも对象的にならなくてはならない」(KMG 70、傍点引用者)とすら述べていたのであった。このことは、対象化の理解に関してヨナスとブルトマンの間に根本的なズレがあったことを暗示している。

二人の書簡におけるヨナスの反論を見ていこう。ヨナスは、彼の立場が「美学的」であり、「外側から見」ており、「固有の実存理解の表現ではない」というブルトマンの指摘が妥当だと認める。しかし、「美的なるもの」に関する限り、「調和の概念(対立の和解的統一)」をヨナスは単純に想定しているわけではないと断っている。何故なら、宇宙的調和を乱すものこそ——これは神を失望させることなのであるが——悪をなしうる能力をもった人間だからである。そうであるからこそ、人間の出現によって神は打ち震えているのであり、人間の段階において倫理的なるものが問題になるのである。つまり、生命の進化における——人間の出現以前の——「形式、多様性、個性性、強度、体験、生命の自己変容、そして死は美的概念である」(ZNE 70)けれども、神を打ち震えさせる人間の自由つまり悪をも犯しうる能力の出現の段階に対して「美的なるもの」の概念を当てはめることはできないのである。しかし、だからと言って、それ以前の段階における「美的なる

もの」の意義が否定されるわけではない。むしろ、「この存在の充滿をそれ自身のうちに受け入れること、その充滿に対して目覚めており開かれていること、その充滿を再び反映すること、その充滿を認識すること、そして認識しつつその充滿を愛することは、存在へ自身を外在化させた神性に対する人間の倫理的義務の一部ですらある」(SNE 70)。

ブルトマンによれば、神話が本来表現しているのは人間の自己理解である。しかし、ヨナスによれば、この自己理解はもっぱら対象化を経た全体的なるものの理解においてのみ可能である。そして、全体的なるものの理解は「外側からみる」ことを意味している。何故なら、それは全体的なるものの理念一般を要求するからである。全体的なるものは概観のために表象されるのである。精神の自由は、理念において、我々自身も属している全体的なるものをもって行われる。

ここでヨナスの話は倫理学へと向かう。倫理学は存在論に基礎付けられなければならない。人間の行為の規則は、全体的なるものの本性から導き出されなければならないからである。人間は全体的なるものに対して存在しているのであり、全体的なるものが人間に対して存在しているのではないという認識を獲得することが倫理学の基礎付けには不可欠である。⁽¹⁶⁾

ヨナスの神話における、受肉へと向かった神性の全体的なるものは、生成する運命である。ストア派における全体的なるものは、常に完成された世界であるが、ヨナスの神話においては、その運命は決定されておらず、絶え間なくその都度決定〔決断〕されなければならない。人間において、人間とともに決定〔決断〕されていると言ったほうが正しいかもしれない。その意味で、人間は神に対して、その都度の現在において代替不可能な仕方では責任を負っているのである。

五、総括

以上、ヨナスが自ら創作し語った神話の思想的背景を探ってきた。ヨナスの神話には、ブルトマンを超えるモチーフが隠されている。もちろん、ヨナスは当初からブルトマン批判を目論んで自らの神話を語ったのではないだろう。しかし、結果

としてはそのようなモチーフをその神話は持つこととなった。そうであるが故に、逆説的にであるが、ヨナスの神話の意義を誰よりもいち早く見抜いたのもまたブルトマンにほかならなかった。

ヨナスは倫理学の存在論的基礎付けを目指したが、そのために彼岸性と此岸性とを連続させる宇宙論が必要であるように彼には思われた。彼岸と此岸を媒介しているのが、神の全面的な自己放棄である。この自己放棄は、結果として、長い進化の過程を通じて登場した人類に神に対する責任を負わせるものであった。人間の責任性は神の無力性に対応している。ヨナスは、神は創造の際に全面的に無力になり、自然の因果性に介入することができなくなったが、それでも人間に呼びかける力だけは残されていると考える。その神の呼びかけがこの世界で実効的なものになるかは、ひとえに人間の責任にかかっている。ヨナスの立場からすると、カント的三元論を踏襲しているブルトマンの奇跡理解では、神の呼びかけに対する応答が倫理へと展開することは見込めなかった。神の呼びかけに対する応答は個人の実存の問題に閉じ込められてしまう。ヨナスからすれば、これでは倫理学の存在論的基礎付けは果たされ得ない。実存主義においては倫理学は不在である、とヨナスは言う。この批判をヨナスはもっぱらハイデガーに向けたが、それはブルトマンにも等しく当てはまるものであった。つまり、ヨナスの思想の代名詞である責任倫理学の構築は、ハイデガーだけでなく、ブルトマンをも批判的に乗り越えなければならなかったのである。ヨナスの神話はこのことを証言しているのである。

註

- (1) Hans Jonas, *Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Frankfurt a.M. 1979.
- (2) Hans Jonas, *Gnosticism, Existentialism, and Nihilism*, in *The Phenomenon of Life: Toward a Philosophical Biology*, Northwestern University Press, 1966. (以下、PL)

- (3) Hans Jonas, *Der Gottesbegriff nach Auschwitz. Eine jüdische Stimme*, Suhrkamp Taschenbuch 1516, Frankfurt am Main, 1987.
- (4) Hans Jonas, Is Faith Still Possible? Memories of Rudolf Bultmann and Reflections on the Philosophical Aspects of His Work, in *Mortality and Morality: A Search for the Good after Auschwitz*, edited by L. Vogel, Northwestern University Press, Evanston, Illinois, 1996, pp.209-210, note[9]. なお、この論文は、一九七七年公刊の原稿をヨナスが自分で修正した語(注記を記す)から英語に訳したものである。この引用した英語版の注の文言は、一九七七年のドイツ語版にはない。
- (5) Hans Jonas, *Immortality and the Modern Temper*, in PL.
- (6) Hans Jonas, Anhang: Aus einem Briefwechsel zwischen Rudolf Bultmann und dem Verfasser anlässlich des Aufsatzes über die Unsterblichkeit, *Zwischen Nichts und Ewigkeit. Zur Lehre vom Menschen*, Vandenhoeck&Ruprecht, Göttingen, 1963. (以下、ZNE)
- (7) ヨナスの「ブルトマンは一九六三年の「神観念と現代人」に於いて、ヨナスの神話に肯定的に言及している。Rudolf Bultmann, Der Gottesgedanke und der moderne Mensch, in *Glauben und Verstehen. Gesammelte Aufsätze IV*, Tübingen, J.C.B.Mohr, 1965, S.124. (以下、GVW)
- (8) ヨナスは、この stake は Schritt ではなく、賭け事における Einsatz (掛け金、担保) の意味であると反論している (ZNE 67)。
- (9) なお、笠井圭一『ブルトマン』(清水書院、一九九一、九〇頁)。
- (10) Hans Jonas, *Augustin und das paulinische Freiheitsproblem. Ein philosophischer Beitrag zur Genesis der christlich-abendlandischen Freiheitsidee*, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1930, S.68. この「非神話化」概念の成立のこともこの書に於いて Vgl. Hans Jonas, *Erkenntnis und Verantwortung: Gespräch mit Ingo Hermann in der Reihe "Zeugen des Jahrhunderts"*, Hrg. Ingo Hermann, Göttingen : Lamuv, 1991, S.49-55.
- (11) Vgl. 「ヨナスの神話は、神話論的な希望に固執していた。しかし同時に彼は、キリスト教信仰にとって世界の終わりは、宇宙論の意味とはまったく別の意味をもっていることを理解していた。つまり——別言すれば——信仰している実存は終末論的実存である」とある……〔註釋、このこと〕」 Rudolf Bultmann, Das Befremdliche des christlichen Glaubens, in *Glauben und*

Verstehen. Gesammelte Aufsätze III. Tübingen, J.C.B.Mohr, 1960, S.203. (以下'GVⅢ')

- (12) Hans Jonas, Im Kampf um die Möglichkeit des Glaubens. Erinnerungen an Rudolf Bultmann und Betrachtungen zum philosophischen Aspekt seines Werkes, in *Gedenken an Rudolf Bultmann*, J.C.B.Mohr, Tübingen, 1977. (以下'KM/G')
- (13) Hans Jonas, Is Faith Still Possible? a.a.O. (Fn.4), p.209.
- (14) Vgl. Rudolf Bultmann, Zur Frage des Wunders, in *Glauben und Verstehen. Gesammelte Aufsätze I*. Tübingen, J.C.B.Mohr, 1933, 1961⁴.
- (15) Rudolf Bultmann, Wissenschaft und Existenz, in GVⅢ, S.123.
- (16) ヌーニースにおけるものの全体と部分の思想の崩壊の問題について、以下を参照せよ。Hans Jonas, Gnosticism, Existentialism, and Nihilism, in PL, pp.221-224.

(かねまち・まこと) 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)